

豪雨二モ マケズ

第二版

あの日から
歩み続ける
支え合いの
軌跡

被災地発
支え合い活動
事例集



①	はじめに……………	1
②	地域のチカラ……………	2
③	被災地発支え合い活動 事例紹介……………	4
No.1	川辺 地域と踏み出したその一歩が大事な人を守る道につながる。	
No.2	岡田 つながることで前を向く 地域のチカラを信じている。	
No.3	菌 「みんな」が元気になるために「みんな」でひとつになる。	
No.4	二万 あの日から 笑顔と気持ちをつなぎ続ける。	
No.5	箭田 思いの数だけ誕生した地域の「ほっと(癒・和・熱)」する場所。	
No.6	呉妹 「居場所」で地域を語り合う。共に生きるこれからのために。	
No.7	服部 日ごろからの顔の見える関係が二度と分断されないために。	
④	支え合いのチカラ……………	18
⑤	あなたの声を聞かせてください……………	41

豪雨ニモマケズ

豪雨にもまけず
災害にもまけぬ
丈夫な地域のつながりを持ち
いつもしずかにわらっている

地域の人や情報、資源を
よくみききしわかり、そしてわすれず

東に子育ての悩みがあれば優しく見守り
西にお年寄りの困りごとがあればちょっと手を貸し
南に日々の暮らしに不安があれば寄り添って話を聞き
北に地域の課題があれば解決方法をとともに考える

誰かの痛みになみだをながし
何か出来ることはないかと心をくたく

みんなが地域の一員であり主役とよばれ
支え合うことが当たり前となる
そういうまちにわたしは生きたい



※この「豪雨ニモマケズ」は宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩に
真備の復興と支え合い社会実現の思いを重ね、被災者や
支援者の意見を参考に作成した詩です。

1 はじめに

「災害に負けない支え合いの地域へ」

私たちの日常生活が大きく変わった
平成30年7月の夏。

信じられないくらい雨が降り、信じられないことが起こってしまい、信じたくない現実に向面したあの日から、それぞれの「日常」を取り戻すための歩みが始まりました。

たくさん環境の変化を経験した人、たくさん決断をした人、やり場のない思いに涙がこぼれた人、過ごした時間は決して緩やかなものではなく、今もなお住み慣れた自宅や地域を離れ生活を送る方も多くおられるなか、被災地復興に向けた取り組みや支援活動はこれからがいっそう大切と言えます。

そんななか、発災当初から被災者の大きな支えとなったのは、地域が大切に育ててきた絆や文化を活かした「人と人とのつながり」や「お互いさまの支え合い」でした。

そして、その取り組みは被災地の至る所でその地域に応じた方法で展開されています。

この「被災地発支え合い活動事例集『豪雨二毛マケズ 第二版』」は、発災から約半年の地域の支え合い活動を紹介した前回の第一版に続き作成したもので、地域や住民、支援者のこれまでの取り組みと、これからに向けた思いを紹介した冊子です。

災害というテーマだけでなく、高齢化、人口減少、担い手不足、地域の孤立化等すべての地域の課題解決の糸口にもなる支え合い活動や元気な地域づくりの実現に向け、多くの方にこの事例集をご活用いただき、被災地復興や支え合いの地域づくりの一助となれば幸いです。



被災から1年2か月の間、真備町内ではとてもきれいで温かみのある手書きお知らせ「エプロンばあばの見た目のお知らせ」が掲示されたり、配られたりしていました。全19号です。

段々にぎやかになっていく紙面に真備町の復興を重ね胸が熱くなった方は少なくありません。

誰かが描いて貼っているのは、詮索NG。わかっているのは「エプロンばあば」という名前と溢れんばかりの「真備町愛」。これからも「エプロンばあば」は真備町に愛情を注ぎ続けてくれることでしょう。



『NO.9 真備町11月21日(水)PM2° エプロンばあばの見た目のお知らせ』より抜粋

② 地域のチカラ

「豪雨が奪ったもの 地域のつながりが取り戻すもの」

多くの人が「いつまでも、暮らし続けたい」と願う『**住み慣れた地域**』。

この言葉のなかには一人ひとりが自分らしく、幸せに暮らしていくためのたくさんの要素が詰め込まれています。

住み慣れた地域には、自分の落ち着く「**自宅**」があり、自宅以外でもそこに居るとホッとできる「**居場所**」もあります。

これまでの住民同士のつながりのなかで生まれた「**馴染みの関係**」や「**マイペースな生き方**」があることが、地域での生活をいつそう輝かせてくれます。

「自分の役割」があり、「癒し」があり、「思い出」が詰まった地域だからこそ、多くの人がこの場所で生きていきたいと願うのです。

豪雨は地域と住民のこれまで積み上げてきた、大切な宝物を土砂に埋め、水で押し流してしまいましたが、これまでの地域でのつながりや安心感があるからこそ、「再びこのまちに帰りたい」「この人たちと生き続けたい」と願い、その実現に向けた意思や取り組みは、新しい地域づくりの原動力となっています。

住み慣れた「地域のチカラ」が支え、救うものは日常の自分らしい暮らしであり、非日常（災害時）のなかでの命でもあります。

住み慣れた地域



「非常時でも日常でも

目指すのは「暮らし」にたくさんの「き」がつく支え合いの「くらしき」

暮らしに「寄りそう」

日頃のつながりがあるから、いざという時に助け合つことができず。「お互い様」「ついでだから」「お互い様」「ついでだから」と寄り添う支援が日々の暮らしと地域のこれからを支えます。

■日常

- ごみ出し ●掃除
- 電球交換 ●草刈り
- 買い物 ●送迎 等

■災害

- 家屋の片付け ●相談
- 見守り支援 ●移動支援
- 生活支援物資のお届け 等

暮らしが交わる「機」会

出会いや、話し合いのきっかけ（機会）は地域の色々なところにあります。きっかけづくりを応援することで、「支え合い」はいっそう加速します。

■日常

- 通いの場
- 地域の交流会
- 小地域ケア会議 等

■災害

- 居場所や交流の場づくり
- 思いや本音がこぼれる場と支援へのつなぎ 等

暮らしに「気づき」

お互いの暮らしに関心を持つことから「支え合い」は、はじまります。愛情ある人への気づきは気づかいと気配りへ広がっていきます。

■日常

- 挨拶 ●声かけ
- 井戸端会議 ●見守り 等

■災害

- ご近所さんの状況や連絡先の把握
- 避難時の声掛け 等



- 「暮らし」に「気」づかい・「気」配りを
- 「暮らし」が交わる「機」会を大切に
- 「暮らし」に「寄」りそう
- 「暮らし」の場に「帰」ってこられるように
- 「暮らし」の場をより良くする「企」画を
- 「暮らし」に「喜」びや「希」望を



一人ひとりの「暮らし」が「輝く」まちづくり



災害を通して得た3要素が地域づくりの推進力に

1

愛情

普段は何気なく暮らしていたこの地域。災害が起きて、まちの景色が変わって改めて気づいた、地域のあたたかさや心強さ。「このまちで暮らしたい、このまちを守りたい」。

「わがまち」に「わがごと」意識が芽生えたとき、愛情あふれる地域づくりの第一歩を踏み出します。

2

危機意識

「次に同じような災害が起きた時、どのように対処したらいいだろう?」「家族や近所の人を守れるだろうか?」大きな被害を受けた経験と教訓は、必ずこれからの防災意識や日頃からのつながりづくりに活かされます。

3

きっかけ

一人ひとりの支え合い意識が地域の支え合い活動へ広がるために、みんなで集い、話し合う「きっかけ」も大切です。今回の災害は被災地以外の地域でも、日頃からのつながりづくりだけでなく、同じ倉敷の住民として被災者・被災地にどのような関わりができるかを考える大きな契機となりました。

01

あの日から間もなく「川辺復興プロジェクトあるく発足」



たくさんの方が集まって、子どもたちの声が響いていた元氣な川辺の景色を取り戻したい…。そんな思いを受けて「川辺地区まちづくり推進協議会」の榎原さんを中心に結成した「川辺復興プロジェクトあるく」は、多世代の担い手によって運営され、川辺小学校に設置されたプレハブは、地域のイベントや居場所づくり、情報発信等の拠点となりました。

02

あの日から1年半「川辺小学校復旧」



川辺小学校校舎が復旧し、園小学校に併設された仮校舎で過ごしてきた子どもたちが1年半ぶりに帰ってきました。多くの住民のかけ声と拍手に迎えられる子どもたちは元氣いっぱいに登校。

新たなスタートとなった3学期の始業式では、スイートピーの花束が一人ひとりに贈られました。全員で校歌を斉唱し、体育館の2階に上がって、復興への願いを記した手づくりの紙飛行機を一齐に飛ばしました。

あの日から今まで、そしてこれから… 私たちのまちは一歩ずつ歩みを進めています。この章では、真備の地区ごとの復興にむけたこれまでの活動とこれからの思いを紹介します。

03 あの日から2年「防災おやこ手帳完成」



交流の場は少しずつ、まちづくりの場へ。
あるくがおこなった「パパ・ママアンケート」の結果から、災害で得た教訓をたくさんの子育て世代に伝え、命と暮らしを守るヒントにしてほしい！と防災ブックが完成しました。
川辺地区の被災者の体験談、分散避難を考えるためのマイ避難先や避難スイッチ、お役立ち防災グッズなど、気軽にわかりやすい内容で様々な機関と連携し作成しました。
真備町内の全保育園・幼稚園・小学校に配布し、必要な方にもお配りしています。

右側のプレハブ「あるく」、左側の「てくてく」で様々な交流活動を行っています。今後も手芸や勉強会、体操など継続して行っていく予定です。



04 地域でみつけた「これから」 ～みなし仮設のある地域で生まれた絆～

みなし仮設住宅のある地域での支え合いや地域のつながり。住んでいた地域は違いますが、支え合う気持ちに「地域の壁」は存在しませんでした。
「被災者を支えたい」という気持ちは、地域に新たな絆をつくり、その絆は被災者が前に進むための大きな力になっています。



▲生活の相談にのってくれた地域の自治会長楠本新太郎さん。



▲田村聡子さん(右)と母親の田村潤子さん(左)。



▲郵便の手続きの相談等で力になってくれた、下津井郵便局の山本郵便局長。

発災の日、川辺に住んでいた田村聡子さんは、救助隊により助け出され九死に一生を得ました。
その後は、児島(下津井)のみなし仮設住宅に入居しましたが、田村さんはみなし仮設住宅での生活を振り返り、「決して孤独ではなかった」と話します。
「真備に戻れば知り合いがたくさんいるし、児島には、発災直後から支えてくれた同級生や、みなし仮設住宅のある地域の自治会長、郵便局長や高齢者支援センターや社会福祉協議会など、困ったことがあれば何でも相談にのってくれる人がいたから」と、その理由を教えてくださいました。

地域のチカラを信じている。

No.2

おかだ

岡田

01

あの日から間もなく 「岡田分館の集い」

被災後、岡田地区の公民館「岡田分館」では、災害ボランティアセンターのサテライト拠点として多くのボランティア活動の現場調整を行ってきました。

そこに、地域の方が被災の状況に関係なく集い、ボランティアの道案内や詳しいニーズの把握など、よりきめ細かい支援が行われました。そして、ボランティア活動の合間には、自然と住民同士がそれぞれの心境を語り合ったり、これからの地域のことを話し合ったりする場が生まれました。



02

あの日から1年 「おしゃべりカフェ」



被災から数か月後には岡田分館の一次改修が完了して、またこの場所が集えるようになりました。

しかし、住民の生活も変わり、住宅の改修が進んでいる人や遅れている人、地区外での生活を余儀なくされている人など様々でした。

「生活がバラバラになってしまった今だからこそ、顔なじみが集い、お互いの近況を気軽に語り合える場が必要」との思いから、岡田地区では平成30年11月から「おしゃべりカフェ」を開催しました。季節に合わせてイベントや、支援団体の協力もありましたが、基本はみんなのおしゃべりが中心です。

遠方の避難先から参加する人もいて、多い時には130名もの人が集まり、開催時間いっぱい語り合いました。

以前から分館を積極的に活用していた岡田地区の住民だからできる、「気持ちの復興」に向かうための集いの場となりました。

03

あの日から1年半 「岡田を災害に強いまちに【その①にげる】」完成



岡田地区では発災から約2ヶ月後には、自分たちの地域がどのような災害にあったのかをまとめる作業に取り掛かりました。「発災時に」「この場所で」「どんなことが起こったのか」を災害を経験した住民として、正確な情報が集まる早い段階でまとめていくことが、必要だと考えたからです。

そのために、大学の先生のアドバイスを受けて情報をまとめ、幅広い年代の住民へのアンケートなども行い、一つひとつ被災の状況を整理してきました。

そして、みんなの情報や避難のタイミング、移動手段などをまとめた冊子「岡田を災害に強いまちに【その①にげる】」が令和2年2月に完成しました。この冊子は、逃げ遅れから二度とみんなが悲しい思いをしないために、岡田地区の全世帯に配布されました。

地域の記憶と経験がまとまったこの冊子は、岡田地区だけでなく、幅広い地区で防災を考える参考になっています。

04 地域でみつけた「これから」



▲岡田分館の窓に貼られた幼稚園児の夢や目標。子ども達の夢を応援する気持ちは、ずっと続いています。



▲発災後に分館前に灯された子どもたちが作った灯籠。



住民のこゑ

「今はコロナで大変な時期だけど、集まる方法を考えたり、情報を共有することは大事」

「みんなやりたいことはたくさんある。一部の人に負担がかからない仕組みも考えないと」

「今は世代間の交流は難しいけど、子どもとも一緒に何かしたい」

「地域や歴史のことを子どもたちに知ってもらうには、一時的な体験だけでなく、継続的で意味があるものにしていきたいな」

「みんな」でひとつになる。

No.3

その
菌

01

あの日までもあの日からずっと 「地域の集いの場」



▲「子ども達が笑えない日々が気になっていたの」と上有井公民館でサロン活動をしていた代表者は語ります。被災後は地域住民と支援団体と一緒に子どもを中心とした集いの場を何度も開催しました。

高台にあった上有井公民館は上有井の被災者の避難所として長く利用されました。もともと地域の交流の場所であったところですが、被災後はさらに年代を問わず集える場所になっていきます。それはコロナ禍の今でも続いています。



02

あの日から半年 「みんなに申し訳なくて 集ったり 笑ったりしては いけない気がしていた」



砂走さくらいきいきサロン



サロンさかの

その他のサロン活動も、災害を通じた経験や思いから「自分たちが今できることはなんだろう」と話し合い「交流の場をとおして、みんなで一緒に復興に向けてがんばっていきこう」という意識を共有しました。

「被災した皆に申し訳なくて、声をかけることができない」「笑ったりしてはいけない気がした」こんな声も聞かれましたが、「自分たちが元気でないと支え合えない！」「と思いつき、活動が再開されました。」

菌地区には被災した地区と被災していない地区があります。「こんな時に集っている場合ではない」としづらく集うことを自粛していたサロンもあり、被災していない方の葛藤も、一言では表せないものがありました。

「みんな」が元気になるために

03

あの日から時間がたった今だから 世代を超えて語り合えること「菌っ子だっぴ」



菌小学校が元の学校生活に戻っていくなかで、「災害が起きたあの日のことを振り返らずに、このまま記憶から消してしまってもいいのか」という思いがあったと、高津校長は話します。

そんな時、以前からつながりのあった「NPO法人だっぴ」の柏原さんに相談し、6年生の総合学習で「菌っ子だっぴ」に取り組みました。菌地区の大人と児童と大学生（高校生）が同じテーマでフリックトークを行います。「好きな給食は？」「心ってどんな形？」「どんな人になりたい？」そして「あの災害の時のことを今どう思う？」



お互いの体験と思いを伝え合い、共感し新たな気づきを持ち、そして笑顔になりました。

地域の一員として尊重し合える関係づくりにつながっています。



04

地域でみつけた「これから」



▲「マニュアルを作成することで、役員が変わった後も後任が困らないようにしたい」と、発災時に避難した坂の上の神社を眺める三海自治会長。

有井の小山地区では、令和元年の夏頃から独自の避難マニュアルを作成しました。

ただ「声をかけよう」というだけでは実際の避難は難しいとの思いから、地区を4班に分け、避難後はリーダーに連絡を入れる体制など、具体的な内容を決めました。

現在は地域の拠点だった小山公会堂を改修する話を進めています。まだ地区に戻れない人とのつながりを保ちながら、みんなが待っている地元行事の再開を目指しています。



災害から2年半が過ぎ、菌小学校では災害発生の「そのとき」の思いや「それから」の日々の記録を残しておくことはとても大切であると考え、防災教育副読本「西日本豪雨災害の教訓を未来へ」と令和元年度卒業生がまとめた「無限大（西日本豪雨46人の語り部）」を発行しました。

中学生も活躍中



真備東中学校1年生の総合学習の取り組みの中で、「私たちが今真備でできること」を考えているチームがあります。自分たちも地域みんなも笑顔になれるそんな活動のきっかけになるよう…

01

あの日から間もなく 「開かれた居場所二万仮設団地談話室」



二万仮設団地では、談話室をいつもオープンにしておくことを住民みんなで決めました。多くの支援者、まちづくり推進協議会や地区社会福祉協議会などの地域の団体、ママ友、住民さんどうしのおしゃべり会・・・たくさんのつながりが生まれ、誰でも気軽に集え憩える場所になりました。

つながった絆は、それぞれ行き先が分かれても途切れることはありません。

02

あの日から1年半 「被災していないからこそ 矢形東谷地区の取り組み」



矢形東谷地区の集会所は発災時にあわや床上というところまでの浸水でした。この地区は4町内で組織されています。低いところ高いところが混在し、土砂崩れの危険地区もあれば、盤石な高台もあり、共通した危機意識が持ちづらい地域でした。

半面、ほとんどの住民は顔見知りで、向こう三軒両隣の関係が根づいているところでもあります。

この西日本豪雨災害で危機意識を持った地区の有志とそれぞれの地区の行政連絡員や総代が集まり、地域



矢形東谷サロン

この地区ではサロン活動も活発。30人以上が集い盛り上がります。

の実情について全世帯へアンケート調査を行い、その結果に基づいて「今自分たちの地域ではどういったことが必要なのか」さらに話し合いを重ね、指定避難所以外の避難場所を決めたり、端町内では避難の際の声掛け連絡網をつくり、いざというときに備えることになりました。



03

あの日から1年半
「二万仮設団地での関わりから地域での住民交流会へ」



1年半が過ぎても、つながった絆は健在です。この日はおかやまコープ・チーム夏色・倉敷医療生活協同組合・二万地区社会福祉協議会と建設型仮設の住民、二万地区住民もみんな一緒にフェスティバルを開催し、大勢が二万分館へ足を運び、交流を楽しみました。

「二万に住んでいるのだから、仮設住宅の住民も地域の一員がモットーの二万地区では、毎月最終土曜日に二万分館で行われている『親睦の会』という通いの場にも被災者をお誘いしています。」



『親睦の会「和」』

- 開催日時：毎月最終土曜日 13:30～16:30
- 飲み物代 100円
- カラオケ・茶話会など。出入り自由

04 地域でみつけた「これから」

住民のこえ

自分たちの地区はほとんどが顔見知りで日ごろからのつながりはある方だと思う。それでもいざとなったら慌てて、普段は出来ることもできないかもしれない。命を守るためにはまず個人個人が逃げることが大切だけれど、その時に慌てないよう、この地区の誰も逃げ遅れることがないよう、非常時の仕組みづくりが必要だと思う。

(60代女性)

暮らしの中で「助けて～」「よきた！任せとけ！」が言い合える地区になってほしい。

(70代女性)



地域の「ほっと(癒・和・熱)」する場所。

No.5

や た
箭田

01

あの日から間もなく 「地域みんなの顔と心が集うたくさんの場所」



ごじとまさんのキッチンカー前で青空サロン



プラザ坪田 駐車場でソーメン流し



平成30年11月 久しぶりの「タケノコ百歳体操の会」は外で!
(箭田分館前)



5m以上浸かった商店で物資配布とおしゃべり拠点

被災前から真備地区内の医療・福祉・介護の事業所、行政・当事者・ボランティア等で構成している緩やかかつながりの会(真備連絡会)と地元有志が一緒に行っていた「地ビールと音楽の夕べ」。

それが、震災直後8月から箭田分館前の駐車場ですらに多くの住民と一緒に、毎月開催し、地元を懐かしむ大勢の集いの場になりました。その年の12月からは「まちコン」と名称新たに、老若男女みんなの集いの場として開催されています。

他にも公園やお店、住民宅等、色々な場所で大小様々な集いが行われ笑顔があふれました。

02

あの日からずっと 必要なのは何より人とつながる場「介護予防教室&ほっとサロン」

「誰かに会いたい人、ほっとしたい人は誰でもどうぞ」地域を問わず、被災の有無を問わず、多くの人が集っています。

あの日から3か月で始まったこのサロンは、多くの人の笑顔と関係をつなぎながら、2年半経った今でもそしてこれからも継続していきます。

箭田地区社会福祉協議会推進員のメンバーは「今、地域住民のためにできること、必要なことは何だろうか?」と度々作戦会議を行い、人と人が顔を合わせ話をする場の必要性を痛感し、高齢者支援センターと協働でこのサロンを始めました。



『介護予防教室&ほっとサロン』

- 開催日時：毎月1回 第4月曜日
10:00~12:00
- 開催場所：ライフタウンまび
⇒現在は真備保健福祉会館3階
- 参加費：無料「ごじとま」のコーヒー付き



03 あの日から約2年「地域連携型合同防災訓練」



▲防災メール及び箭田防災ライングループの登録ブースの様子。操作が苦手な方もこのブースで登録できます。



▲想定以上に大勢の参加があり、防災意識の高さがうかがえました。

平成30年7月豪雨で最も深く長い時間浸水していた地区の一つである箭田地区。住民の被災当時の振り返りでは、「避難をするタイミングを逸してしまった」「放送が聞えなかった」という声が多くありました。そのため、令和2年11月23日に行われた避難訓練では、「逃げる」という避難の目安をいかに全戸に知らせることができるか、ということを目標に行われました。

避難訓練では、地区内の福祉施設と連携し、支援が必要な方々の避難のサポートの演習も行われ、地域と施設・事業所との役割分担も確認できました。箭田地区では「箭田防災ライングループ」があり、この避難訓練でもどいういった規模の災害が起こっているか、避難訓練に合わせてリアルに情報を発信していました。このような工夫を行いながら、少しずつでも確実に「逃げ遅れゼロ」への道を歩んでいます。



▲受付を手伝うのは地域の中学生。地域の一員として役割をもつて参加。



▲真備連絡会と合同で要支援者の避難を想定した避難訓練。建設型仮設団地の集会所とまきび荘へ。(写真上は真備総合公園建設型仮設団地の集会所)

04 地域でみつけた「これから」

住民のこゑ

被災して思ったのは『人とつながっていくことの大切さ』です。

今まで関りのなかった方や知り合いでさえなかった方々が力を貸してくれ、一緒にこれからを歩もうとしてくれる心強さや嬉しさ…。「ありがたいな、大切だな」としみじみ思います。

また、これからの地域でのつながりが「〇〇しなければならぬ」という義務的なものではなく、普段の何気ない暮らしのなかで、挨拶をしたり、一緒に笑ったりできる、ふんわりと温くなるようなものとなるよう、向こう三軒両隣のつながりづくりをしていきたいと思っています。

(片岡さん)

子どもから大人まで、障がいのあるなしに関わらず、みんなが生き生きと暮らせる住みよいまちになったらいいと思う。

様々な理由で人と関わるのがしんどくなってしまった人達や引きこもりの人達へも防災などの情報を届けられたらと思う。

また、そういった方々へのアプローチをそれぞれの地域で頑張られている社会福祉協議会や民生委員などの方が関わり方などで困っていたら、ピア活動の一環としても手伝えることがあるのではないかと思います。



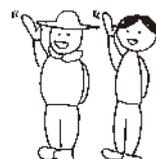
どんな障がいを持っていても、それぞれの関わり方で、地域の一員として役割を担うことができることをもって知ってもらいたい。

(矢吹さん)

01 あの日から間もなく「笑顔と気持ちがつながる訪問型サロン」



発災以降「情報が入ってこない」、「物資が不足している」「ご近所さんと話せる場がない」などの住民さんの声に対応するため、住民、ボランティアの協力で訪問型サロンが行われました。「どこでもできるよ」とあちこちで場を提供の声がかかり、笑顔の輪が広がりました。

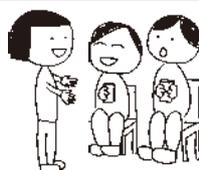


02 あの日から1年「呉妹を元気にする会・地域の施設との連携～分館での活動へ」



「呉妹を元気にする会」は、オール呉妹(子どもも大人も、被災の有無にかかわらず)の笑顔のために、呉妹地区で若手を中心に通いの場をつくり活動しています。呉妹分館修復中は、地域の介護事業所が場所を提供し、だれでも参加できる交流スペースとなりました。

10時頃から昼食を挟み13時頃まで開いていて、自分の好きな時間でいつ来てもいつ帰っても構わないスタイルです。参加者の要望でスマートフォン教室やたこ焼きパーティをしたことも。分館修復後は、呉妹分館に場所を移し、第4火曜日に開催中です。



「居場所」で地域を語り合う。

03

あの日から1年3ヶ月 自分たちのこれからを語り続ける「防災ばぁ」



この会と呉妹地区まちづくり推進協議会の防災班がこれからは語り続けることで熱意は呉妹地区全体に広がり、要配慮者マイ・タイムラインの作成も進んでいます。



▲「要配慮者マイ・タイムライン」本人とご近所さん、家族、関係団体 皆と一緒に作成

「被災してから今まで本当にがむしゃらに進んできました。地域の人たちとのつながりもでき、日々過ごすなかでこぼれる言葉からふと防災という目的をもって集い、自分たちのこれからをどうしたらいいかを語り続ける集いがあったもいいのではないかと思います。」
『防災ばぁ』のきっかけを片岡奈津子さんはこう語ります。発災から1年3ヶ月で始まったこの会は毎月1回午後6時から8時頃まで語り合っています。



▲第1回防災ばぁ
そーる訪問看護ステーション
トレーラーハウス内にて



◀参加費は1ドリンク
300円

04

地域でみつけた 「これから」

住民のこゑ



▲要配慮者マイ・タイムライン作成会議を重ねる真備地区民生委員児童委員協議会 呉妹・服部支部の委員。

要配慮者マイ・タイムライン作成を進め、一人の逃げ遅れもない地区にしていきたい。
(40代女性)

非常時に動けるように日ごろのつながりを大切にできるまちにしていきたい。
(40代女性)

支え合える地域になるといいなと思う。
(70代男性)

思いやりのある地域を目指したい。
(60代女性)

若者がリーダーシップをとれるまちになってほしい。
(70代男性)

二度と分断されないために。

No.7

はっとり

服部

01

あの日から間もなく 「地域の絆を取り戻した 服部地区集いの会」



自宅の復旧が進むなか、9月中旬に被災した人から聞こえてきたのは、「皆でもう一度集まりたい」という声でした。しかし服部地区では、以前まで地域の集まりの場であった真備公民館服部分館が全壊し、すぐには復旧も困難な状況でした。そんななか、服部地区に住む瀬崎宏子さんは、自宅が全壊しているにも関わらず「地域のためになるのであれば」と、ご主人が経営されていた板金塗装工場跡地を提供され、9月下旬に「第1回服部地区集いの会」を開催しました。

再会された方々のなかには、「あなたが帰って来るならわたしも帰ってくるよ」と抱き合う方もおられ、つながりを再構築するきっかけづくりの場となりました。

◀第1回目の服部地区集いの会

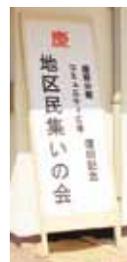


▶集いの場を盛り立ててくれた瀬崎 宏子さん

02

あの日から迎えた初めての春 「服部分館とコミュニティ広場の復活」

豪雨は住民の生活だけでなく、昔から続けていた地域行事も奪っていききました。しかし、平成31年4月、服部分館とコミュニティ広場の拠点が復活。地域の拠点が戻ったことで、発災前の服部の風景をほんの少し取り戻すことができました。



▲昔から服部で行われる「ふれあいの夕べ」住民皆の思いを込めて「はっとりがんばろう」とロウソクを並べました。

03

あの日から2年

『逃げる場所がないからこそ作りたい!』

そんな思いから設置された4つの届出避難所



▲▲平成30年7月豪雨により被災した服部地区

多くの地域行事が復活するなかで、「逃げる場所がない」という課題は服部地区に残りました。そんななか、「久能周辺自主防災会」は「服部は平成30年7月豪雨のおり、水も引かず、発災から2日後になってやっと救助が来た地区。災害はいつ発生するか分からない。地域の高齢者等が早く、安全に避難するためにも、近い場所に避難所をつくりたい」と、3か所の届出避難所の設置に尽力しました。

また、先の水害での孤立を契機に、服部と箭田という2つの地区を跨いで結成された「遠田地区自主防災会」でも新たに届出避難所が設置されました。

逃げる場所がなかった服部に設置された4か所の届出避難所は、神社やお寺や個人宅など、地域と馴染みの深い場所が選ばれており、地域のつながりがあったからこそ実現したこの取り組みは、これからも地域を守り続けます。

04

地域でみつけた「これから」



◀久能周辺自主防災会 届出避難所「八幡神社」



▲遠田地区自主防災会 届出避難所「妙見山 本住寺」



▲久能周辺自主防災会 届出避難所「久能周辺自主防災会 会長宅」



◀久能周辺自主防災会 届出避難所「鶏足山 極楽寺」



4 支え合いのチカラ

交流支援

「なんだか寂しくなってきたね」
住民さんの一言から始まった、
この日は誰かがいる「かようび」
(通う日)



会い、三さんサロン

(倉敷市社会福祉協議会
復興支援コーディネーター
通称 FC)



FCは被災地でのつながりづくり
居場所づくりを行っています
(FCの漆原と田淵)

『会い、三さんサロン』 つながる3つの『さん』

- ① 誰でも「さん」か(参加)OK
- ② 気軽に相談して不安・悩みを
はっ「さん」(発散)
- ③ 「さん」さんごご(三々五々)自由な
時間に来て、帰ってOK

仮設団地で

「会い、三さん」

3つの『さん』で
つながりましょう!

「三密」避けながら、「三さん」の居場所を
定期的に開催します。「寂しい」「相談したい」
「情報がほしい」等 皆さんのお越しをお待ちしています!

<p>毎月第2・第4 金曜日 13:30~</p> <p>真備総仮設</p>	<p>毎月第2・第4 水曜日 13:30~</p> <p>市場仮設</p>
<p>毎月第1・第3 水曜日 13:30~</p> <p>三万仮設</p>	<p>毎月第1・第4 水曜日 13:30~</p> <p>みその仮設</p>
<p>毎月第2・第4 水曜日 13:30~</p> <p>岡田仮設</p>	<p>毎月第1・第3 金曜日 13:30~</p> <p>柳井原仮設</p>



▲みその仮設での「会い、三さんサロン」
真備支え合いセンターも参加。何気ない会話の中から気づき
やニーズがわかる。

自宅の再建が進む。喜ばしいことなのに一抹の寂しさも。
気持ちに寄り添い続ける活動と地域でのつながりやコミュニティの
再構築など、この章では被災地に生まれ、継続している活動を
紹介します。

「仮設に来るボランティアの人たちも減って、ここ
におった人らも、地元やそれぞれのところに戻るん
で、段々に減って。再建が進んだ証拠なんじゃけ
どなんか寂しゅうなってきたわ」住民さんがポツリ。
そんな住民さんの「つぶやき」から『会い、三さん
サロン』は始まりました。
誰が来ても来なくてもその日、そこには人がいて、
3つの「さん」でつながります。仮設から引っ越した
方も、ずっと地域で頑張っている方も、いつでも気軽
にのぞきに来ることが出来る場所を目指しています。

『会い、三さんサロン』

- 開催日時：月2回 13:30~15:30ごろまで
- 開催場所：真備総集会所・真備総談話室・
市場仮設集会所・みその仮設談話室・
岡田仮設談話室・三万仮設談話室・
柳井原仮設集会所
- 令和3年1月現在 全91回開催



▲オンラインサロン開催のきっかけになった「つながる回覧」

コロナ禍での つながりの工夫 オンラインサロン



▲「ふらっと真備」中央大学の学生ボランティアの皆さんから届いた手紙



岡田仮設では、**日本赤十字社岡山県支部のボランティア**さんがオンラインサロン。(写真上)
体操もオンラインでできます！（写真下）



FCのつばやき

日赤のボランティアの方々は、避難所支援から継続して、支援を続けています。コロナ禍ではオンラインを活用し、おしゃべりや健康づくりができる体制も作ってくれました。また、岡田仮設団地では子どもも気軽に利用したり、サロン以外でも気になる方を見守るために談話室を開けたりと、住民同士の優しいコミュニケーションが、自然な支え合いにつながっています。



▲真備総仮設で「ふらっと真備」の学生さんとオンラインサロン

市場仮設と真備総仮設に関わっていた**中央大学の学生ボランティアグループ「ふらっと真備」**の皆さんからそれぞれに手紙が届きました。

真備総仮設団地では、コロナ禍で、集ったり外へ出たりすることや、会う機会も減った住民同士の近況報告も兼ね、当時の仮設連絡員さんが回覧板にして回しました。

回し終えたものを、ボランティアの方へお礼がてら送ったところから「直接会えなくても何かつながり合いたい」という気持ちがお互いに高い、オンラインサロンの開催へとつながりました。

**とても居心地のいい空間
真備総談話室**

いつでも開かれている。マスクを作ったり、手芸をしたり、テレビを見たり。わいわい、おしゃべりに花を咲かせる女性陣、冷やかしのぞく男性陣。障がいがあっても、認知症でも、やんわりと優しい気づかいで誰でも寄れる場所でした。

FCは見た！



学生パワー ノートルダム清心女子大学 人間生活学科 濱崎ゼミの学生さん



▲おしゃべりをしながらのリース作り。
「こりゃあええな」男性も参加しています。

地元の学生も大活躍。
「私たちでもいいのかな？」から「私たちがだからこそできる」へ。
参加されている方々は、一緒に時間を過ごすことで、気持ちが若返ると好評です。
長い関わりがお互いの関係性を築いています。

仮設団地で「会い、三さん」サロン

3つでさんまで
「誰でも参加OK!」
お気軽に相談して不安・悩みを解消
※5ヶ月毎の開催に継続してご参加!

「三さん」だけなら、「三さん」の居場所を定期的に開催します。
「楽しい」「相談したい」「情報を知りたい」
皆さんのお越しをお待ちしています!

真備総仮設団地 集会所
日時：1月12日(火)
14:00~15:30

ノートルダム清心女子大学の
学生と一緒に、簡単な体験
や、**書き初め**、**送迎**などを
して、楽しい時間を作りたい
ませんか?

【参加費】 仮設団地生活支援協議会真備事務所
仮設団地運営センター(ノートルダム) 担当
〒710-1301 倉敷市真備駅前1161-1 0868-698-40

県外からも息の長い支援 兵庫県立豊岡総合高等学校 インターアクトクラブ



▲地域で行われたオンライン研修会でもスマホの操作を「教える」スタッフとして大活躍。

「こんにちは」
「待ってましたよ」
笑顔いっぱい時間です。



インターアクトクラブの高校生は
遠く豊岡市からやってきます。
大人がワークショップを楽しんで
いる間に高校生は
顔見知りになった
子ども達と個別訪
問へ。



▲細かい作業もお手の物の豊岡総合高校生たち。
ランドセルのキーホルダーづくりのワークショップ。

「こんにちは」
子どもの屈託のな
い声に、部屋の中
にいた住民さんも
思わず笑みが。
普段は見守られ
ることが多い子ど
も達も高校生を従
えて、立派な支援
者の一員でした。

真備自慢

真備町有井に
「おひさま広場※」という
真備を支援するグリーンコープさんと
NPO法人災害支援団Gorillaさん
が作ったコミュニティスペースが
あります。
ここで毎月1
回第4土曜日に
開催されている
のが「おひさま
マルシェ」です。



マルシェを上手に利用している真備町内のサロンもあります。
通いの場で作ったものや畑で採れたものを売り、サロンの活動費&個人の生きがいがつくりにつなげています。



- ※『おひさま広場』
地域住民同士の「助けあい・支えあい」による地域でのコミュニティづくりが目的
- コミュニティスペース：330円/3時間
 - 調理スペース：110円/1時間
 - 冷暖房：110円/1時間

仮設住宅での 買い物支援

FCは見た!



真備総・市場仮設団地では「シルバーセンター後楽さん」、柳井原仮設団地では「グリーンビレッジ瀬戸内さん」が施設の地域貢献で買い物支援のために車を走らせてくださっていました。
仮設団地だけでなく、これからも地域の方と一緒に買い物支援のしくみづくりを考えていきたいFCなのでした。



**思い出の写真に向き合う
岡山スクラップブッククラブ**



▲二万仮設でスクラップブック。
この日はおかやまコープの方もボランティアで参加。



▲柳井原仮設でスクラップブック



支援者の方々はもちろん、地元住民の方々からも「いつでも声をかけてね」「都合がよかったら行くよ」と声がかかります。建設型仮設の集会所・談話室が、被災の有無に関わらず、誰でも気軽に来て活躍できる場・社会参加の場になるといいな…。

**途切れず関わり
続けてくれる安心感
日本ヨーガ協会**



**フレイル予防
体操&健康管理
健康づくり教室**



▲真備総仮設集会所でのヨーガの後の茶話会
真備総仮設では2年以上、ほぼ毎週金曜日ヨーガの時間。おなじみさんの顔がそろいます。



▲市場仮設でヨーガ



▲みその仮設でヨーガ

**仮設団地で支援活動を
続けている団体**



★CAPPO
おしゃべりサロン
みその仮設団地
談話室にて



★おかやま
コープ
「サロン・
訪問活動」



★災害ボランティア
加西らかん
「刃物砥ぎ」



★おたがいさまプロジェクト
「さんさんリフレッシュサロン」

★こころステーション&裏千家
淡交会青年部東中国ブロック
「いっぶくかふえ」



★シルバーセンター
後楽「楽笑会」
真備総仮設団地
集会所にて



★中国臨床宗教師会
「カフェ・デ・モンク」
お坊さんのいる傾聴の喫茶



★グリーンコープ生活協同組合
おかやま

ここからの活動紹介は平成30年度に日本生活協同組合連合会よりいただいた被災地支援金を活用して実施した、地域の交流の場・新たな仕組みづくりの活動です。



まび発！新しい地域づくりを考えるフォーラム

学ぶ



「大きな災害を経験し、地域のつながりの大切さを再認識した真備町だからこそ、新しい地域づくりを意識して今からみんなで動き始めよう」
 そんな思いを込めて、東日本大震災の被災地から講師をお招きし、被災後の地域住民と行政と地域の事業所の連携のあり方について、発表とパネルディスカッションを行いました。

- 開催日：令和元年7月12日(金) 15:00～16:30
- 会場：真備公民館 箭田分館 集会室
- 参加者：60名
- 内容：地域づくり実践発表、パネルディスカッション
- 主催：小規模多機能ホームびどうの家真備

▲真備町で新しい地域づくりを目指すため、住民も事業所もみんなで協働することを確認するフォーラムとなりました。



楽しく寄合所

集う
癒す



豪雨災害によって被災し、みなし仮設住宅での生活を余儀なくされている方々に、誰かと一緒にあたたかいご飯を食べながら交流と情報交換ができる場所を提供したい。
 居酒屋「楽らく」の店舗を活用した、こども食堂「楽らく寄合所」はそんな思いから開設され、食事やおしゃべりを通して孤立しがちな時期に被災者と地元住民のつながりと元気を与えました。

- 開催日：全21回開催（毎月第3日曜日）
- 会場：いざかや楽らく
- 参加者：のべ約550名
- 内容：こども食堂、情報交換、相談支援等
- 主催：楽らく寄合所



▲こども食堂の活動を終了後も、失業した被災者と共に就労継続支援B型「ひかり工房」を立ち上げ、障がいのある人の活躍と地域交流の場所となっています。





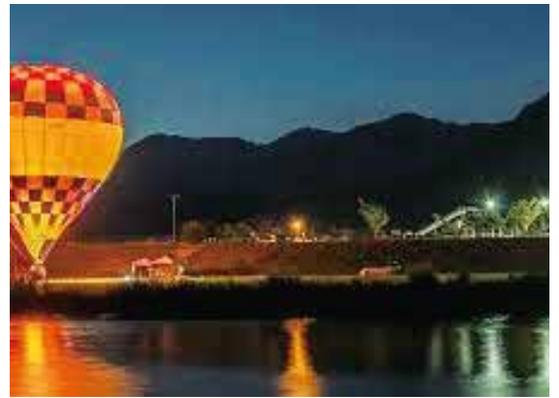
くれせ宵まつり

集う



災害により、地域で行われていたイベントが中止となるなか、復興に向けて何より大切な地域の人と心のつながりを取り戻すことを目的として「くれせ宵まつり」が企画されました。

子どもも大人も楽しめ、地域のみんなが参加出来るように、準備や計画の段階から、地域の様々な団体や企業、被災地支援団体にも参加と協力を要請することで、みんなつながり、みんな「呉妹を元気なまちにしていこう」という意識が高まりました。



- 開催日：令和元年8月4日(日) 17:00~20:30
- 会場：まきびさくら公園
- 内容：気球の夜間係留フライト
竹あかり点燈・芥川高校和太鼓演奏
呉妹小学校生徒によるソーラン節
白壁町家ライブ、屋台・出店等
- 主催：くれせ宵祭り実行委員会



夏休み宿題大作戦!!

学ぶ
遊ぶ



夏休みを活用して子ども達が子どもらしく、「思いっきり遊び」「勉強もして」「思い出をたくさんつくること」を目的に「ぶどうの家BRANCH」を会場として全7日間開催しました。子どもたちの遊び相手であり、宿題を教えるのは、学生ボランティアと地域のおじちゃんとおばちゃんたち。子どもを中心とした支援が地域みんなをつなぐ活動に広がりました。



▲頼れる地域のシニアさんたちも子ども達の学びと遊びを優しくサポートしてくれた。

- 開催日：令和元年7月14日(日)・7月15日(月・祝)・7月21日(日)・8月5日(月)・8月7日(水)・8月21日(水)・8月25日(日)
- 会場：ぶどうの家BRANCH
- 参加者：のべ155名
- 内容：宿題、レクリエーション、食事づくり等
- 主催：NPO法人ぶどうの家わたぼうし



集う 学ぶ

呉妹を元気にする会



◀スマホ教室や災害のお知らせアプリの使い方等様々な講座も開催

オール呉妹（大人も子どもも被災の有無にかかわらず）の笑顔のために呉妹地区で若手を中心に立ち上がった地域の居場所です。自分の好きな時間で自由に出入りできるスタイルで参加者同士が交流しています。また、交流だけでなく、参加者からの要望でスマホ教室を行ったたり、防災について意見交換したりもしています。

呉妹地区の介護事業所や小学校と連携しながら交流を広げ、現在は復旧後の呉妹分館で地域に元気を発信中です。

- 開催日：令和元年4月～ 毎月第4火曜日 11:00～15:00
- 会場：デイサービスセンター米寿・呉妹小学校体育館・呉妹分館
- 参加者：毎回10名程度
- 内容：おしゃべり・食事会・勉強会・創作活動等、パネルディスカッション
- 主催：呉妹を元気にする会

集う

まびフェス



発災から1年の節目の時期に、住民が音楽や食事を通じた交流を楽しんでもらうことで、住宅再建や地域復興の元気を分け合えることを目的とした「まびフェス」が開催されました。

各種防災のまちづくりに向けた体験や協賛企業による足袋の製造実演体験や学校給食の提供など様々なイベントを通して、たくさんの方々の再会の場となりました。



- 開催日：令和元年6月30日(日) 11:00～
- 会場：菟小学校
- 内容：音楽イベント・学校給食の提供・ワークショップ、防災カフェ、自衛隊車輛の展示説明会
- 主催：まびフェス実行委員会



竹&ふれあいフェスタ2019（ふれあい夏祭り）

集う



※写真は「倉敷とことこ」より転載しています。

これまでも毎年開催してきた、箭田地区の大きなイベントでしたが、令和元年度の竹&ふれあいフェスタは運営者、出展者、出演者、来場者の多くが被災者という状況になりました。それぞれが現在住む場所もバラバラではありましたが、長年続いてきた学区のイベントは地域のつながりや住民同士が元気を高めあう大きな役割を果たしました。参加者からは「まちが元気になっているのを体感できて、うれしかった」などの声が寄せられました。



▲現代の吉備真備公を選ぶ選考会も行いました。

- 開催日：令和元年8月24日(土) 15:30～18:30
- 会場：吉備真備駅前広場(ロータリー)・真備支所
- 参加者：約3000人が参加
- 内容：そーめん流し・ステージイベント・模擬店・ポスター展・福引等
- 主催：夏祭り実行委員会



まびの集い in 老松

招く



◀老松学区の皆さんと一緒に食事を楽しんだり、地区の交流の場の情報提供を行いました。

老松学区のアパートにも、真備から多くの被災者がみなし仮設住宅で生活を送っていることを知った地元コミュニティ協議会が「少しでも今いる生活の場で真備の人同士がつながり、さらに老松の住民と交流してほしい」という思いから、「まびの集い」を開催しました。

老松中洲高齢者支援センター等の支援機関とも連携をはかることにより、イベントの開催情報を届け、真備と老松をつなぐ場となりました。

- 開催日：令和元年6月26日(水)・10月8日(火)・令和2年1月28日(火) 11:00～13:00
- 会場：老松小学校・老松学区ふれあい会館
- 参加者：第1回(11名)・第2回(12名)・第3回(7名)
- 内容：昼食・交流会等
- 主催：老松学区コミュニティ協議会



集う響く

大間ジロー岡山復興応援トークライブ



▲cafe陶では、「笑いヨガ」を毎月第2・4木曜日10:30~11:30に、「4DSヨガ」を毎月第3日曜日に行っています。その他にも各種イベントを行っています。近くに倉敷市民貸農園もあります。



玉島地区で被災者と交流の場づくりを行っているcafe陶では「オフコース」のドラマーとして活躍された大間ジロー氏を迎えて、岡山復興応援トークライブが実現しました。以前からオフコースの大ファンだったという参加者は、憧れの大間さんと会話したり、ドラムを叩かせてもらったりと、忘れられない時間となったようです。

- 開催日：令和元年8月12日(月) 13:30~15:00・18:30~20:00
- 会場：cafe陶
- 参加者：60名
- 内容：トークライブの開催
- 主催：cafe陶

招く

ほっと笑待会



▲被災者も支援者もみんなと一緒に集い、しゃべり、食事を楽しむ空間となっています。

住み慣れた自宅や地域を離れて暮らす被災者の方々が、環境の変化によって気持ちが落ち込んでしまわないように、人や地域とつながって笑い合える地域の居場所が「ほっと笑待会」です。心の健康づくりをサポートする心ほっとサポーターを中心に、保健師や高齢者支援センター、さらに被災地支援団体や地域の介護保険事業所等も加わって、地域みんなで支え合い、楽しい時間を過ごせる場となっています。

- 開催日：平成31年3月11日(月)・令和元年5月13日(月)・7月15日(月)・9月23日(月)・11月18日(月)・令和2年1月20日(月) (10:00~13:00)
- 会場：玉島公民館 長尾分館
- 参加者：のべ479名
- 内容：食事会・創作活動・情報提供・世代間交流等
- 主催：ほっと笑待会



まちいろフェスタ

集う



▲復興アーティストの imiml は、発災当初から真備町でボランティア活動を続けながら、歌声で元気を届けてくれました。

「少しずつでもいいので、災害前の一人ひとりの暮らしの色やまちの色を取り戻そう」という目的で開催されたまちいろフェスタ。
当日は、真備かなりや保育園の園児や保護者も参加して様々な防災の体験ができる防災カフェや復興アーティスト imiml によるライブを行いました。
災害救助犬ふれあいコーナーや会場の清願寺の綺麗なお庭を眺めながらのカフェコーナーなどを通して以前のつながりの再構築とこれからの復興を意識する機会となりました。



▲煙体験ハウスで防災の勉強もできました。

- 開催日：令和元年11月13日(水) 12:20～16:00
- 会場：清願寺
- 参加者：190名
- 内容：住職による法話・音楽ライブ
防災カフェ・災害救助犬ふれあいコーナー
- 主催：マチノイロ実行委員会



夏色

訪ねる



▲参加者とおしゃべりしながら、画家のボランティアさんが似顔絵をプレゼントしてくれました。



▲夏色の活動は、学生ボランティアも加わって、みんなで歌っておどって、いつも笑いに包まれます。

建設型仮設団地への入居が始まったところから、様々な支援団体やボランティアグループが建設型仮設団地での交流の場を支援してくれました。柳井原仮設団地や二万仮設団地を中心に活動を継続した「夏色」もその一つです。支援物資の提供や季節に応じたイベントの開催、笑いヨガなど、

学生ボランティア(金光学園木綿崎ボランティア部)も参加して住民の日々の交流の入り口づくりに尽力されています。

- 開催日：令和元年 8月24日(土) 11:00～12:00
12月21日(土) 10:00～14:00
- 会場：柳井原仮設団地・二万仮設団地・二万分館
- 内容：交流サロン・クリスマスミニフェスティバル
- 主催：夏色



がんばっているよ！川辺復興祭

集う



▲久しぶりの再会。ここから新しい地域交流がスタートします。

川辺地区の小学校や幼稚園、分館が復旧し「地域の子ども達と一緒にこれからの地域を皆で盛り上げていこう」という意識を高める場として川辺復興祭を企画しました。
残念ながら新型コロナウイルス感染症の影響により、大人数が集まる復興祭は延期となりましたが、地域の宝物である子ども達に「おかえり」の意味を込めて、お菓子や記念品を贈りました。子ども達の元気な声や姿が川辺学区をさらに元気にしてくれそうです。



- 開催日：令和2年1月～3月にかけて
- 会場：川辺小学校・川辺幼稚園
- 内容：川辺地区の園児・児童おかえり歓迎会
- 主催：がんばっているよ！川辺復興祭



服部にこここサロン

集う



服部地区でも、「これまで一緒に地域で生活してきた人たちが、以前のように交流できる場が必要」という思いから、被災後わずか2か月後には、地域の工場跡地や自宅を活用した交流の場「服部地区集いの会」が開催されました。
真備公民館服部分館の改修工事も終わり、新たに「服部にこここサロン」として、様々な機関の協力や参画のもと、地域のみんなが笑い、学び、見守り合える拠点として活動を継続中です。

- 開催日：令和元年10月14日(月)より毎月第2・4月曜日に開催 10:00～15:00
- 会場：真備公民館 服部分館
- 参加者：毎回約25名
- 内容：おしゃべり・食事会・手芸・レクリエーション・勉強会等
- 主催：服部にこここサロン





有井女子会

集う



▲女子たちの笑顔と楽しいおしゃべりが会場いっぱいに広がっています。

未政川の決壊箇所のすぐ近くにある地域の拠点、下有井公民館は奇跡的にわずかな補修で建物をこれまでどおり活用することができました。被災当初は災害ボランティアアセンターの地区拠点として、そして、その後は、地域住民が気軽に集い、戻ってくることでできる場所としてこの公民館はとても大きな存在となっています。被災から4か月後からスタートした有井女子会も、懐かしい人と会える場所、地域のぬくもりを感じる場所として、有井地区の皆さんの帰りと参加を優しく待ち続けています。



- 開催日：毎月第3木曜日 13:30～15:00
- 会場：下有井公民館
- 参加者：有井地区の女子約30名
- 内容：おしゃべり・食事・手芸・勉強会等
- 主催：有井女子会



まびマルシェ in 箭田分館

学ぶ
集う



「子どもから大人まで多世代が集い、真備町がさらに良いまちに生まれ変わるよう、多世代が集い、学べる場をゆるくつくりたい」との思いから医療・介護の専門職チームが実行委員会を立ち上げて、実施したイベントです。

基調講演講師の内藤いづみ先生は、在宅ホスピスの経験を通して地域で生き続ける意味と魅力についてメッセージを伝えてくださいました。

住み慣れた地域でできるだけ自分らしく暮らし続けること、そのための復興をみんなと一緒にとりくむ気運が高まりました。



▲内藤先生のお話にみんなが引き込まれ、みんなが住み慣れた地域の大切さを再確認しました。

- 開催日：令和元年11月3日(日) 11:00～15:30
- 会場：真備公民館 箭田分館
- 内容：基調講演・模擬店・ステージ発表
- 主催：内藤いづみ先生を真備に迎える会実行委員会



真備の集い in 水島

集う



▲水島地区の愛育委員の皆さんが日ごろ練習しているフラダンスを披露してくれました。

今の生活の場である水島地区で、出会いや情報交換をしながら、少しでも元氣を取り戻してほしい。そんな思いから、水島地区愛育委員会主催の「真備の集い in 水島」が開催されました。

愛育委員ならではの発想で、参加者の健康チェックや健康相談に応じ、美味しい食事を食べていただきながら、脳トレやフラダンスなども披露しました。クリスマスの時期の開催となり、参加者一人ひとりにとって心あたたまるクリスマスプレゼントとなったイベントでした。



- 開催日：令和元年12月6日(金)
- 会場：水島支所 5階大会議室
- 内容：健康測定・健康相談・食事・交流会
- 主催：水島地区愛育委員会



呉妹富士

集う

「呉妹地区がこれから元氣を取り戻していくためにはまず私たちが元氣でないと！」

改修工事が終わって新しくなった呉妹分館に集まったメンバーはみんなで話し合いながら、毎週1回は顔をあわせて、会話を楽しみ、体を動かす通いの場を立ち上げました。会の名前は呉妹地区を見守る山の愛称と同じ「呉妹富士」。時にはみんなで食事を楽しみ、季節のイベントも大切にするまさに元氣を発信する通いの場です。



▲みんなで一緒に体操をするから継続できるし、一体感が生まれます。

- 開催日：毎週火曜日 9:00～11:00
- 会場：真備公民館 呉妹分館
- 参加者：毎回約20名
- 内容：体操・レクリエーション等
- 主催：呉妹富士



▲コロナ禍で体操後の茶話会は中止。再開が待ち望まれます。



富田高齢者のつどい

招く



▲富田と真備のつながりがさらに深まるイベントになりました。

これまでは、学区の高齢者を対象に開催していた「高齢者のつどい」でしたが、せっかくみんなが交流し、楽しめるイベントなら、真備の皆さんもぜひ、招待して、少しでも元気を持って帰ってほしい。

そんな思いから、当日は送迎バスを用意して、真備町の方をお迎えし、楽しいひと時をみんなで一緒に過ごすことができました。この「ご招待」は前年度も行われており、2年続けて参加された方は「前の年にとっても楽しく笑顔になったので今年も楽しみにして来ました」と話されていました。

- 開催日：令和元年12月8日(日) 10:30～14:30
- 会場：富田小学校体育館
- 参加者：約250名
- 内容：落語・笑いヨガ・和太鼓・神楽・健康測定・健康体操等
- 主催：富田愛育委員会・富田地区社会福祉協議会



まびまあるの会

集う

住み慣れた真備町を離れて暮らす、みなし仮設住宅在住者を主な対象に、これまでも継続して定期的なサロン活動を実施してきたまびまあるの会。被災者の声は、「なかなか情報が届かない」「自分だけがポツンと生活をしているように感じる」などの不安や悩みが多く、その気持ちを少しでも交流によって軽減できるよう様々な工夫をしながら復興に向けた活動を続けています。

12月には音楽と食事を楽しんでもらえるよう、クリスマス会も開催されました。



- 開催日：月1回不定期開催 13:30～16:00
- 会場：くらしき健康福祉プラザ・川辺分館等
- 内容：おしゃべり・食事・レクリエーション等
- 主催：まびまあるの会





復興イベント三世代ふれあい広場

集う



▲校庭中庭ではゲストの皆さんが元気な踊りを披露してくれました。



▲地域の様々な団体が、模擬店やゲームなどを分担しチームワークの良さがうかがえました。

「住民同士が集まり、顔をあわせて語り合うことが新しいコミュニティづくりの第一歩であり、その場を学区をあげてみんなで作ろう」という目的で開催された「三世代ふれあい広場」。

令和元年度は8月と11月の二回開催し、いずれもたくさんの方が参加し、活気にあふれたイベントとなりました。発災以来、初めて顔をあわせ再会を喜ぶ姿、元気に走り回る子ども達の姿、響く笑い声にこれからの菌の未来が見えてきました。

■開催日：令和元年 8月18日(日) 16:00～19:00
 11月17日(日) 10:00～13:00
 ■会場：菌小学校
 ■内容：模擬店・ステージ発表・作品展示等
 ■主催：菌地区まちづくり推進協議会



たけのこ

動く



■開催日：毎週金曜日 午後から
 ■会場：真備公民館 岡田分館
 ■参加者：毎回約20名
 ■内容：おしゃべり・体操等
 ■主催：岡田体操教室「たけのこ」

災害前から地域で行ってきた健康づくりを目的としたサロン活動をしましたが、集まる拠点やサロンで使用してきた備品も使えなくなっていました。地域からは再開を望む声も多くあり、岡田分館の改修を終えたタイミングで「たけのこ」の活動も再開しました。体操は主に「百歳体操」を取り入れています。みんなで一緒に体を鍛え、その後みんなでおしゃべりをするのも大切な時間となっています。

下有井町内会 研修会・交流会

話し
合う



災害に負けないつながりと災害によい防災の仕組みづくりを住民みんなで考え、実現することを目的に、これからの自主防災組織や町内会の活動について学び、話し合うイベントを開催しました。地域の避難場所や町内会連絡網等についても意見が交わされ、今後の地域活動の広がりが期待されます。

- 開催日：令和2年3月22日(日)
10:00～13:00
- 会場：下有井公民館
- 参加者：31名
- 内容：研修会～各自で作成する防災行動計画～・
自主防災組織について・交流会
- 主催：下有井町内会

下有井ふれあい会

集う



「下有井の地域みんなが一緒に交流できる場をつくりたい」との声から始まった「下有井ふれあい会」。
会を実施するために実行委員会が立ち上げられ新しい担い手や協力者も多く仲間に加わってくれました。
当日は交流を心待ちにした住民がたくさん来場され、公民館も末政川の河川敷にもたくさん人の輪ができていました。

- 開催日：令和元年度3回開催
- 会場：下有井公民館
- 内容：おしゃべり・健康チェック・食事
- 主催：下有井ふれあい会実行委員会

創ろう！防災ネットワーク

学ぶ



それぞれの地域で災害を経験した芥川高校(大阪北部地震)、矢掛高校(西日本豪雨)、伊具高校(台風19号災害)の学生たちが、その体験から「自分たちも復興を支援する側にまわりたい」という気持ちから防災ネットワークの構築を目的とした交流会を開催しました。若く、元気な支え合いの芽が県を超えた大きなたつながりや支援ネットワークに広がっていくことが今後期待されます。

- 開催日：令和2年2月11日(火・祝)
- 会場：矢掛町町家交流館
- 参加者：19名
- 内容：高校生による災害の体験・活動報告、意見交換会
- 主催：創ろう！防災ネットワーク実行委員会

ここからの活動紹介は令和2年度に岡山県共同募金会から配分された被災地復興支援の活動助成金を活用して実施した、地域の交流の場・新たな仕組みづくりの活動です。

集う

宮田団地の住民の集い



『宮田団地集会所 お披露目会』

- 開催日：令和2年12月20日(日)
11:00～
- 会 場：宮田団地集会所
- 参加者：33名

◀集会所完成お披露目会。みなし仮設から戻った住民さんが一言。「ドアを開けたら知った顔にあえるのが嬉しい」

被災する前は、いつもの集会所でいつもの顔ぶれが集まるのが日常でした。突然の災害で、自宅やご近所さんと離れて生活をするなかで、「みんなと会いたい」「ゆっくりとこれからのことを話したい」という声があがり、住民同窓会が企画されるようになりました。

新しい地域をみんなでもう一度作りあげていくためには顔を合わせる機会も大切ですし、災害に強い仕組みや意識を築いていく必要もあります。

コミュニケーション再編のため、宮田団地の新しい地域づくりは、大きな一歩を踏み出しています。

『町内会再結成 についての会議』

- 開催日：令和2年7月26日(日)
13:00～
- 会 場：真備保健福祉会館3階
- 参加者：35名

町内会再結成にむけた住民会議。▶満場一致で再結成決定。



学ぶ

絆を深める会



▲町内を超えた「ご近所さん」交流会。「久しぶり」「これからまたよろしくね」



▲「再会の集い」久しぶりに町内の皆が顔を合わせました。



▲防災に関する勉強会の様子

原田団地の自治会によってはじめられた地域の交流の場・学びの場です。災害に強く、住民に優しい団地をみんなで作りあげるため、避難訓練や防災に関する勉強会、要支援者のための介護教室や、地域の美化活動・サロン活動等に取り組んでいます。

11月に開催した交流会では、原田団地だけでなく集いの場を持たない近所の町内にも声かけをして、絆をいっそう深めることができました。



真備町写真洗浄@あらいぐま岡山

磨く

まちの大部分が水に飲み込まれた真備町では、家屋だけでなく大切な思い出もまた、水や泥に浸かって被災してしまいました。『思い出』を取り戻し、『これから』を目指すお手伝いをしたい。そんな思いから始まった、写真洗浄の活動は多くの方の共感と参加を得ながら、2年を越え、写真洗浄が新しい地域住民の活躍の場や、出会いの場にもなっています。

「まだまだ、新規の依頼もあるなかで、最後の1件まで取りこぼしが無いように写真と被災者の心を救いたい」

磨かれていく写真と地域の関係に、これからの真備が見えてきます。



▲1枚1枚丁寧に、心を寄せながら写真洗浄の作業は続きます。

これまでの活動実績

- 写真の預かり件数：534件
 - 処置後の返却件数：459件
 - 処置枚数：約30万枚
 - 活動日数：272日
 - 活動参加人数：8603名
- ※令和3年1月17日現在



いのりんジャパン

祈る



▲真備町のシンボルを守るための竹林保全活動の様子。



◀まだまだ使える家電を集めて、被災地へ届ける。家電収集プロジェクト。

◀建設型仮設団地の「よしす」の取り付けや撤去作業もお手伝いします。

いのりんジャパンは平成30年7月豪雨災害の被災地支援活動をきっかけに設立した団体です。

発災当初から、被災家屋の片づけや、地域住民と協働で取り組んだクリーン作戦、竹林整備等様々な寄り添い支援を展開しており、その支援は倉敷に限らず県外の被災地に広がっています。

令和2年度は、新型コロナウイルスの影響により、様々な活動が制約されるなか、真備町の住民に向け、手作りマスクや除菌水を配布したり、建設型仮設団地での作業支援を行うなどの活動を通して安心と元気を届けてくれています。



サロンへつながる種まき事業

啓発

『本郷地区住民の集いの場』

- 集まって楽しむところからサロン立ち上げまでの6回をサポート
- 場所：本郷公会堂
- 内容：茶話会・体操・折り紙・スクラップブックなど



『呉妹分館周辺の高齢者の集いの場』

- 集まって楽しむ習慣作り2回
- 場所：呉妹分館
- 内容：スクラップブック・おしゃべり



「集まって、こんな時間を過ごすのも悪うねえなあ」

地域の住民が少しずつ戻り、家屋の修繕が一息ついていくなかで、「今までの交流を再開したり、新たに茶話会などは開きたいが、音頭をとるのが大変で、なかなか実現できない」といった声もありました。

そんな思いを受け、交流の場づくりを希望する地域に出向き、再開に向けた支援ときっかけづくりをお手伝いする心強い活動が「サロンへつながる種まき事業」です。



真備町地域活性応援隊～竹あかり～

彩る



▲真備の子どもたちとキャンプを企画竹で作った水鉄砲に大はしゃぎ！

地域住民と協働しながら、被災家屋の片づけや、竹林の整備支援、竹灯籠の作成等を通して様々なイベントで感動や元気をプレゼントしているのが「真備町地域活性応援隊～竹あかり～」です。

家屋修繕のボランティアグループからスタートした「竹あかり」はメンバーが集まりやすい夜、主に活動をしています。

竹灯籠だけでなく、子どものために竹のおもちゃや、竹貨（竹のコイン）なども制作しています。

真備の夜を彩る竹灯籠のやさしい灯は、被災者に心を寄せるボランティアと前を向いて復興を目指す住民が織りなす色かもしれません。



▲新型コロナウイルス感染症の収束を願って、「あまびえ」の竹灯籠神輿も製作しました。



一般社団法人epoおかやま笑顔プロジェクト

支える



「星を観る会」での炊き出しの様子。

おかやま笑顔プロジェクトは、岡山県だけでなく全国で発生する自然災害に対し、支援活動を効果的に実施するため平時・発災後を問わず様々な機関との連携をはかりながら防災の活動や被災者支援に取り組む支援団体です。
真備町でも建設型仮設団地での交流イベントの企画や、地域に向けた炊き出し支援、防災研修会の企画・実施など、様々な活動を展開しています。
11月に行われた、屋外での「星を観る会」でも温かい食事を届けてくれました。



▲少しひんやりした夜にあたたかい食事がとても喜ばれました。



▲岡山から県外の被災地へ支援と元気を届ける活動も継続しています。



真備・岡田の復興・再生を考える会

築く



▲いろいろな立場の方が参加をして、たくさんの復興に向けた熱意が集まる場となっています。



真備・岡田の復興・再生を考える会では、住民だけでなく国土交通省や、市議会議員も参加され、河川工事の進捗状況の確認や復興・防災の情報交換を行っています。災害の記憶を風化させないために、惨禍を後世に伝承する方法も検討しています。
この活動は回を重ねるごとに、まちづくり推進協議会ほか、商工会や専門職等、地区を超えた分野にも広がってきました。
これに伴い、令和3年1月から名称を「まび創成の会」と改め、引き続き安全な真備を求めて頑張っています。

- 開催日：毎月第3水曜日 17:30～
- 会場：真備公民館 岡田分館
- 参加者：約30名
- 内容：復興、防災の検討・情報共有
- 主催：真備・岡田の復興・再生を考える会（現「まび創成の会」）



真備追悼復興二年式

誓う



▲災害で犠牲となった51名の方に向け、同じ数だけ鎮魂の花火を、その後コロナ禍を皆で乗り越える決意を込めてさらに24発の花火を打ち上げました。

豪雨災害から2年を迎えるのを前に、真備町の復興支援を継続して行っている多数の団体が連携して、「真備追悼復興二年式」が開催されました。

「災害からどれだけ時間が経過しても忘れてはいけない出来事や失われた命をふりかえりつつ、みんなで未来を描きながら歩きたい」「追悼の想いと元氣なまちへの復興の誓い、両方の気持ちを込めて、花火とスカイランタンを空高くあげました。



▲参加者それぞれの想いを乗せて次々と夜空に上がるスカイランタン。オレンジ色の温かで優しい光に包まれました。

- 開催日：令和2年7月4日(土)
- 会場：高梁川河川敷
- 参加者：約200名
- 主催：NPO法人災害支援団Gorilla



まび男性介護者の会

結成

参加者の地域は限定せず、介護経験のある男性ならずどなたでも参加できます。町内外の専門職の方など、支援者の参加もあります。介護の悩みを一人で抱え込まないよう、隔月に集い、同じ経験を持つ仲間と話し合ったりフレッシュするとともに、介護の工夫や知識などの情報交換をしています。



「介護の苦労は体験した者でなければ理解してもらいにくい気がする」「男性が気軽に出席して介護の悩みを話したり、助言しあう場はなかなか無い」「被災で、生活環境が変わり介護の負担が増え、ストレスもたまる一方…」そんな男性介護者の情報交換、気分転換の場としてこの会は始まりました。



▲ドクターを招いた勉強会。オンライン開催しました。

- 開催日：奇数月第3土曜日 10:00～
- 会場：箭田分館・ぶどうの家BRANCHなど
- 参加者：男性介護者・OB・ボランティア



寄り添う

チーム山本



▲住宅の壁の取り壊しや床の張替えなど、「チーム山本」の支援活動の幅はとても広いのが特徴です。

防災士の資格を持つ山本さんは、日本赤十字社岡山県支部の防災ボランティアとして、真備町での被災地支援をスタートさせました。現在は、同じ志を持つ仲間とともに「チーム山本」を結成し、被災者から直接、声を聞きながら、住宅再建の手伝いや清掃、各種申請の援助など幅広い活動を展開しています。真備町だけにとどまらず、県内外の災害支援にも積極的に参加をされている心強いチームです。



▲山本さんのトレードマークは赤い帽子。いつも被災者の身近な存在として活躍をしています。

- メンバー：6名
- 活動回数：528回(真備437回、熊本県36回、岡山市27回、新見市13回、長野市11回、福島県いわき市4回)
※令和2年12月末現在
- 活動内容：
 - ・リフォーム前の家屋内外の清掃
 - ・草刈り
 - ・不要物品の廃棄
 - ・その他、困りごと対応



ほっと笑待会

招く



竹&ふれあいフェスタ (ふれあい夏祭)2020

集う



みなし仮設住宅で生活を送る人の交流の場として玉島長尾で開催されている「ほっと笑待会」。昨年度までは多くの支援機関と参加者による食事会形式で企画していましたが、今年度は新型コロナウイルスの対策をしながら、被災者の方も手芸等の得意な力を発揮して活躍してもらえらるような、暮らしに密着したサロンを毎月1回開催しています。



▲箭田小学校有志によるよさこいソーラン踊り。

新型コロナウイルス感染症拡大のなか、多くの人が集まる行事が次々と中止になってはいましたが、毎年恒例の夏祭りは感染予防や内容を工夫しながら無事開催することができました。災害とコロナ禍のなかで、地域の交流を求めていた人たちにとっては心安らぐひと時となったようです。

- 開催日：令和2年9月～毎月第2or第3月曜日 9:30～11:30
- 会場：玉島公民館 長尾分館
- 参加者：のべ77名
- 内容：手芸・おしゃべり・情報提供等
- 主催：ほっと笑待会

- 開催日：令和2年8月22日(土) 15:30～18:30
- 会場：吉備真備駅前広場(ロータリー)・真備支所
- 内容：ステージイベント・福引等
- 主催：夏祭り実行委員会

5 あなたの声を聞かせてください

見守り支援

倉敷市真備支え合いセンター



▲「見守り連絡員」が訪問や電話を通して、暮らしの困りごとをお聞きます。

倉敷市真備支え合いセンターでは仮設住宅等に入居されている皆さまが、地域のつながりの中で、豊かで安全・安心な生活を送れるように、また、仮設住宅での生活を終えた後も、真備地区での生活に戻れるように、倉敷市社会福祉協議会が、倉敷市の委託を受けて、日常生活の見守りや相談支援、コミュニティづくりなどをを行っています。



*職員(見守り連絡員)が戸別訪問や電話で、生活上の困りごとなどをお聞きし、必要な方には行政サービスや関係機関を紹介します。
*イベントや生活情報など、真備地区やお住まいの地区の情報をお伝えします。

- 倉敷市真備支え合いセンター
倉敷市真備町箭田1161-1(真備保健福祉会館1階)
☎086-698-5115
- 倉敷市健康長寿課 被災者見守り支援室
倉敷市西中新田640番地
☎086-426-3380

居場所づくりと支え合い

生活支援コーディネーター

今後生活支援コーディネーターは「お節介」と「安請け合い」をしながら「地域の宝物」がたくさん輝く元気な地域づくりを応援してまいります。

「豪雨ニモマケズ」、復興の原動力となつている、地域が培ってきた文化やなじみのつながりを私たちは「地域の宝物」と呼んでいます。

生活支援コーディネーターは、別名「地域支え合い推進員」とも呼ばれ、一人ひとりの元気な暮らし、支え合いの地域づくりを住民や関係機関と一緒に進める「つなぐ専門職」です。

生活支援コーディネーターをご存知ですか？



※生活支援コーディネーター 長沢、水野、阪本、松本、松岡、山本

- 倉敷市社会福祉協議会 生活支援コーディネーター
倉敷市笹沖180番地 くらしき健康福祉プラザ内 ☎086-434-3301

被災地発 支え合い活動事例集 「豪雨ニモマケズ 第二版」

発行：令和3年3月

制作・発行元：社会福祉法人倉敷市社会福祉協議会
連絡先：〒710-0834 倉敷市笹沖180番地
☎ 086-434-3301 FAX:086-434-3357
メール：kurasyakyo@kurashikisyakyo.or.jp
URL：http://kurashikisyakyo.or.jp/



倉敷市社会福祉協議会
QRコード



この冊子は赤い羽根共同募金の助成金を活用して作成しています。

